

○北海道命名150年記念 インフラ歴史ツアー (五感で感じよう! 地域産業の発展と釧路港の歴史) 【概要】

ツアーテーマ 『地域の暮らしと産業を支える「釧路港」の歴史』

- ◇「釧路港」は、1899(明治32)年に開港し、当時は普通貿易港(米、麦、石炭、硫黄等)に指定されていました。現在は、酪農や農業、水産業の盛んな地域に位置する重要な港湾であり、北海道の産業とともに発展し、世界に開かれた港として、さまざまな役割を持っています。
 - ◇釧路港では、飼料となる穀物の安定的供給と安価な輸送を実現するため、大型船舶による大量一括輸送を可能とする整備が行われています(平成23年「国際バルク戦略港湾」選定)。また、東北北海道地域の搾り立ての生乳や季節ごとの農畜産物が、高速大型船(RORO船)により釧路港から首都圏へ向けてほぼ毎日輸送されており、海を越えて結んでいるのは、正に北海道の大地と日本の食卓と言えます。
 - ◇「釧路臨港鉄道」は、1925(大正14)年に開通し、当時、我が国のエネルギーを担う石炭を炭鉱から釧路港へ運んでおり、道内では唯一の石炭輸送専用の臨港線として、現存しています。また、道路状況が悪い地域の開拓を進めるために作られた「簡易軌道」と呼ばれる鉄路があり、人々だけではなく農作物、牛乳輸送などに重要な役割を果たしましたが、1972(昭和47)年に、全ての路線がその役割を終えました。
- ☆本ツアーでは、東北北海道の主要産業である酪農を支える釧路港の役割や開港から現在に至るまでの歴史と、釧路港が商業港として成長するためには不可欠であった港に通じる鉄路の歴史を現地を巡りながら学び、地域の産業の変遷とインフラ整備の成果を体感します。

催行予定

平成30年9月～10月の期間内で2回まで【土日祝日可】(日程は調整の上決定)

ツアー定員

各回 20名